

改教時報

第八號

明治三十二年四月十五日 敬刊

佛教徒國民同盟會綱領

- 一、本會は佛教徒國民同盟會と稱す
本會は僧侶を除き佛敎各宗信徒及通佛敎的道德の感化を受けたるものなを以て組織す
- 二、本會の目的は佛敎本來の面目を發揮し其感化によりて先づ國民の一致力を鞏固にし漸く富國の術を講して國家の獨立と社會の文明さに資せんとするにあり
- 三、右の目的を達せんが爲に本會が着手すべき事業の方針を定むること左の如し
(イ)各宗管長及各宗高德に本會の賛助を求むること
(ロ)各宗僧侶を奨勵し其學徳を修め其品位を高めしめ又其從來の惡弊を改善せしむること
(ハ)政府をして公認敎の制度を立てしむること
(ニ)政府をして速かに非公認敎に對する處置を明瞭ならしむること
(ホ)政府をして公認敎を保護せしむること
共に又其監督を嚴にせしむること
(ヘ)殖産興業の道を講ずること
(ト)社會問題を研究し社會的慈善的事業を興すこと
(チ)新聞雜誌其他有益の書籍類を發刊すること
- (リ)佛敎の繁榮を妨げんとする不正の行爲を爲すものあるを見認むるときは官民の區別なく自衛上飽くまで之を排斥すること
- 五、本會は佛敎各宗の合同は勿論他宗教と雖宗義及宗制上我國體と衝突せざる宗派に相提携して社會の改善を謀らんことを期す

目次

社説

◎樟州事件と清國布敎

論説

◎本を務めよ

◎宗門教育の方針

◎蓋そ宗教政策を確立せざる

會報

◎本部本會の全
◎越後佛敎徒國民同盟會式
◎同支部の形況
◎北越支部の發
◎米北に於ける政敎問題の趨勢
◎米北第一組の運動
◎長岡町の運動
◎越前佛敎徒同盟會の發會式

◎和泉和泉佛
◎羽後羽後大曲
◎町の有志

社會

◎大日本佛敎青年會春期大會
◎釋尊降誕會
◎佛敎外護の責任
◎敎會堂建設
◎慈善事業
◎婦人論
◎教育基金の用途
◎基督教學校
◎埼玉慈善會
◎西藏探求
◎支那布敎の摸樣

雜錄

◎予か誕生佛

信界

◎靜觀錄(四)佛の人格

文藝

◎文學士 藤岡 勝二
◎在大學 秦 敏 之
◎南浮 智 成

文學士 近角 常觀

政教時報

樟州事件と清國布教

宗教は人類の墮落を救済し、罪惡闇黒の世界に向て、靈界の光明を注がんと欲するもの、故に宗教的眼光を以て之を觀察せんか、彼の頑冥不靈の氓、盲目無智の徒は最も是可憐なるもの、慈愛惻怛の餘、特に彼等に向て同情の涙を注ぐは、是自然の數なり、古今文明先進國か、後進無教の地に向て、傳道者を派遣するが如きは、畢竟此宗教的精神に基因するもの洵に人類の大義として當に踐むべきの本務なりとす。今や西隣清國正に國歩艱難の悲境に陥り、滿朝の紀綱既に弛みて正朔九州に行かれず、在野の志士軀軀志を得ずして、流離間關詳々に辛酸を嘗め、危然たる十八省の疆域、蒸々たる四億有餘の生靈、茫として五里霧中に彷徨す我國一輩を隔て、相隣り、輔車齒唇、交既に久し、近時我國佛教各派眼光を彼に注ぎ、汲々として頻りに開教傳道の策を講ず、若し吾人を忌憚なく言はしめば、内を忘れて外に向ひ、本を去りて末に走るの嫌なしと云ふべからざるも、焦眉の急他を顧みるに遑ならず、各派困難中に在りて聊か隣國に對し誘導啓發の友道を全ふせんとするは、洵に多とするに堪へたり、而して是實に先進國の本務として當に爲すべきの所、宜しく國家は此等の宗教者に與ふるに百般の便宜を以てし、其本務を盡さしむることを勉めざるべからず、今や西歐各國何れも宣教師を

清國內地に派遣し、本國政府は全力を擧げて之が後援をなす獨り我國に至りては宗教者たるもの困難中に處して猶奮然として起つにも拘はらず政府は冷然として相關せざるが如くす吾人は我國爲政者の宗教に冷淡なる太甚しきを痛嘆すると共に、列國環視中、或は國威の消長に關するもの奇きかを杞憂せり、果然樟州に於ける布教者迫害事件は之を事實にあらはして、吾人に左の報道を齎せり、

大谷派布教師加藤廣海、巡教布教の爲め、厦門より樟州に赴きたるに、通行の際、西班牙教會に屬する清國信徒は、突然加藤及び本邦人二人の轎を、同教會柵内に誘ひ、劍を振きて加藤の轎に向て侮辱を加へ、或は刺さんとし、或は轎の一部を破壊し、頗る迫害を極む、加藤轎中に在りて閉目念佛す、遂に之を門外に衝き出せり、是加藤が厦門、樟州、泉州の間に於て、常に多數の信徒を得て大に勢力あるを妬忌せるに基因するもの、西班牙教會收師、累を自己に及ぼさんことを慮れ、直に西班牙領事館に赴き、自ら相關せざることを陳じ、且加藤に向て且つ慰藉し、且つ陳謝す西班牙領事、直ちに日本厦門領事館に來り、牧師の言を傳め渡航し、各地に巡回せしに此事件已來、一般に吾邦人を輕侮する傾向を生じ、吾國人及び清國人にして切齒扼腕痛嘆するもの多し、乃ち臺灣事務所長石川馨は厦門領事に對し公文書を差出せりと

是我國人が大に警醒すべき所、今や佛教各派初めて清國開放の征途に上らむとするに際し、其意志の強弱を試験すべき第一の障礙に相遇せるもの、若し此迫害に避易せんか、先づ佛教傳道の鋒鏑を鈍らしめ、一頓挫を來さむのみ、若し此迫害に打勝ちて猛進一番せんか、清國傳道の前途、靡然として路を開かむ、而して之を成さしむるに否とば、一に政府爲政者の責任に歸せざるべからず、若し政府者にして、冷眼之を看過せば、或は我帝國の威信に關し、各國をして以て鼎の輕重を問はしむるに至らむ。

吾人嘗て、清客某々と語る、彼慨然として曰く

貴邦善隣の友誼、弊邦を誘掖啓發せんと欲せば、佛教の感化を以てするより善きはなし、今や西歐各國巨萬の資を投じて、基督教の傳播に従事す、而して弊邦人心頗る該教を嫌惡す、然れども各國傳道の背後には威服を以て臨むものあり、若し弊邦人にして名を外國基督教會に列するの便宜を得せしむ、之に反して衆人中特に毅然として教會に隷屬せざらんか、外人は之を目するに異教徒を以てし、迫害輕侮至らざる所なし此を以て弊邦人心深く該教を信せずと雖、滔々として其保護の下に立たんとする所以なり、之に反して佛教は弊邦人皆心中悦服して之を歡迎せんと欲する所、若し貴邦政府にして貴邦佛教傳道者を助くること他の外國と趣を同くし、佛教々會に屬するものをして貴國政府保護の下に立たしむるを得ば、弊邦人靡然とし

て子來し、佛教の教域破竹の勢を以て擴張することを

得む
と請ふ此語を以て前記の樟州事件と對比し來れ、如何に我國對清策の勢力微弱なるかを徴するに足らむ、由來我邦加勳の地位に立ち、同文隣國の獨立を扶植すべき地位に居るもの今や却て受勳の地位に立ちて外教所屬の清國信徒の爲めに侮辱を加へらる、是をも忍ぶべし亦何をか忍べかとぞらむ。近時基督教國か清國に對する政策に至りては、吾人は一點も宗教的動機を發見する能はず、彼は基督の名に於て他國を蠶食し、博愛の名に於て人類を迫害し、而して猶平和を口にし、天を指して誓ふ、世に偽善なるものありとせば、實に是偽善の頂點、地下の基督之を見て以て如何の感をか生ずる、吾人眼を内地に專注したりしを以て姑く緘黙の徳を守れり、今や既に自家頭上に點火し來る、豈猛然として起つべきの時にあらざるや、吾人佛教國民は佛陀平等の大慈悲を煥發し、赤心を開きて清國政府の腹中に置き、靈光を以て四百餘州の闇黒を照さるべからず、今や正に我胸量を示すべき好機に當る、政府は須らく、先づ總理衙門に通牒して、彼の頑冥の徒を警醒せしめ、釋然として我國傳道の意志他と異なる所あるを悟らしめ、他の最惠國同等の傳道に對する特權を得るのみならず、以て開教歡迎の意を表せしむべし、現時の對清策の如く進みて其威を示す能はず、退て其信を保つ能はずんば、遂に列國の下風に墮若として、輕侮せられ帝國の威信を失墜し了せんのみ、一言當事者の反省を促すこと爾り。

論説

本を務めよ 藤岡勝二

佛心者大慈悲是なり。慈悲の心あらざれば佛徒にあらず。慈悲の行をなさざれば佛敎の信者とは云ひ難し。慈悲を思ひ慈悲を語り慈悲を行へど、説く者も之をつとめ聞くものも亦之を傳へて久し。されども未だ慈悲の行ひ著しきものなきは何ぞ。著しき慈悲の行なきのみならず、動もすれば無慈悲の行を働くは何ぞ。慈悲の聲かまびすしくして慈悲の行あきどきは畢竟鳥のなき蛙のうたふに異ならず。聲のみにして事足らば山奥にありといふ慈悲心鳥は皆大の佛敎信者なり。聞くもの慈悲の何たるを解せざるにあらざる。説くもの未だ盡さざるにあらざる。説く者も快辯をふるひて之を語り聞くものも亦能くこれをさどれり。然かも未だ其實行のあらはれざるは何ぞ。聞くもの御話として之を聞き、説くものも亦御話として佛の聲色をつかふのみ。經文佛説は説く者の糊口の爲に世にあるにあらざる。説教演説は寄席講談の如く快樂の爲に聞くにあらざる。説くものも誤れるが故に聞くものも亦眠る。聞くもの眠れるが故に高座の説教は眞心なくとも可なり。眞心なくとも可なるが故に偶々眞心をこめて説く人ありとも衆の爲に迎へられざるをなげき、却て眞心もなき御伽法談の人氣を得ることなれり。義理の爲め否名利の爲に説くが故に御義理の様に聞くも尤なり。慰みの如く、御義理の様に聞

くが故に、偶々安心を求め涙を浮べて聞く人ありとも、之をわはれと思ふことなく、自ら此に感ずることなきは勿論、却て狂と笑ひ愚とせしむ。此の如くにして千日千夜の御講を營むとも何の功もなく、また何の功徳にもならず。東に走り西に馳せ、今日は此村明日は彼の町と、聲をからして叫びまはり、草鞋をさらして追ひまはる有様は、十年前も今日も同じ事なり。従て佛敎の有様も依然として昔のまゝなり。集會に人多く来り、御祭りに家臺の賑やかなるを以て、人は盛なりと羨み、活氣ありと悦び。近年殊に職の多少大鼓の音の高低が兎角盛衰の標準となれるが如し。持手籠かならざる旗は幾萬本ありとも紙旗に同じく、活動なき人間は何萬人集るとも萬人形に等し。長年の紙旗、正成の萬人形も眞心あり、實行ありてこそ用には立ちたれ。眞心なく、實行もなければ、縮緬の旗も反古に劣るべく、甲冑いかめしき武者も人形なきの用をなさず。聲大なりとて盛なりといふことなかれ。大勢ありとて強しとて驚くべからず。此頃佛徒はいさゝか聲を大きくしたるを喜び、丈の伸びたる心地して大にそり返り僅かに人數を増したるを誇りて、肩身の廣くなりたる思をなし、忽ち大手をふる。然もそりかへるは後倒れ易きを知らず。大手をふるは他人に衝き當ることを思はず。其無我無心の様子は愛すべきが如しと雖、其兒童らしく智恵淺きは憫むべし。狼りに居高高になりて騒ぐとも、智者は此は豪傑なりともはめせず、佛敎はいかに昔日よりは光りを増したりとも思はざるべし。殊に大言壯語腹にもなき事を吹き散らす

ども、更に世の感動は起さるべし。世は今日大言壯語の人を増し金色燦爛の光りに富みぬ徒らに其中に交りて立ち騒ぐとも、到底目に立つものにあらず。過去數百年來疲れに疲れて身も人も共に痺れはてたるものに於て、聊か聲を立て僅かに目を醒らしたりとも、人は遂に驚きもせず、感心もせざるなり。政教時報が屢々讀者に示したるが如く、國の爲め法の爲め大なる活動をなさんとするに於ては、大なる合同體となる連結を要することは勿論なれども、團體の主義と其行ふとこそとは、團體中の各々の人も亦明かに主義とし行ふべき道理なれば、團體が眞心を以て世に出で所謂佛の大慈悲を心として行ふ以上は、各々の人も其心其行、あらざるべからず。只徒らに合同するとも何の所詮もなく、折角團體を形造りても遂になすところなくして解散するに至るべし。故に此同盟會が時世の必要より起り、眞心より衰へんとする佛敎をみがき上げんと志すときは、各々の人々皆共に眞心なかるべからず。今日は眞心ありてこそ事窮りたるものをも起し立つべし。されば今は新に奮發すべき時にして、外の有様等にかはりてたい騒ぎ立つべき時にあらず。孟子が窮則獨善其身達則善天下といはれたるは此事なり。只今新に足を踏み出さず、説く者も聞く者も、口のみは於て佛の取次をなすに止めず、心と身と共に佛に近かんことを勉むるに當りて初めより天下を呼ぶは事大に過ぎ本末の誤りあるが如し。今は窮して自ら修むべき時なり。聲大きく、人増したりとて、未だ達したりとは云ひ難し。百里の道は一里よりし、一里は

一步よりする道理なれば、先づ以て其獨りを慎み、其意を淨うせば可ならん。慈悲の念、慈悲の行、先づ之を其家庭に施せば如何。天下に號叫して紙旗を樹て萬人形を集むるよりは功多し又功徳にもなる事大なり。君子は家に居て教を國に施す。佛亦其家族を度するに勉めたり。眞心あらん人は夙に之をなして眞實の榮華を得たり。故に予は今其足下より初めんことを望むものあり。説く者聞く者皆共にかくあらんには、説くとき聞くとき、事其身に切にして言自ら眞心より出でん。心心をせめ、心亦心ををさむ。かくの如くにしてこそ佛説も貴く、佛行も行はる。皆人此心を以て其本より立てなば、所謂本立て道生ずの云ひにて、佛道も自ら起るべく成立ちたる團體も其功をささむる事を得べし。萬一已むを得ずして不幸にも團體のどぐる運に到るとも、なしたる程の効は遺りて失せざるべし。只徒らに佛説をかつぎ、佛言を眞似るとも、眞心と實行とあらざらんには、遂に此蜂とらすの有様となり終りぬべし。今は大に眞重を要し、遠き慮りを廻らすべき時なれば、老婆心と笑はるるをも顧みず、佛者の家庭に所謂慈悲心の實行あらん事を切望す

宗門教育の方針

秦敏之

佛門には人物が少くない、之は佛敎の振興原因である、現今佛門に人物の少ないのは事實であるが、今後果して人物の出来る見込みありや、若し各宗本山の教育方針が、相變らず

現今のまゝにしていくものならば、その續かん限りは人物は、すすく、拂底するであらうとは、小生の深く信する所である、各宗本山は現今に於てみな其宗の宗教學校を建て、あるが、その目的は住職を作るが重なるもので、や、進んでは半學者半説教家の折衷的人物を作るのが目的であるやうに思はれる、成程現今の寺院組織では是非共住職を作らねばならぬことなれども、宗教家が教育を施すに當りて、只一寺の住職と説教僧のみを作りて能事終れりとなすが如きは、以ての外のとである、何故に堅固不動の信念ある社會の人物を作らんとせざるか、何故に堅固不動の信念ある社會の母妻を作らんとせざるか、現時の日本は、宗教上の信念ある人物が最も拂底せる時なれば、この國家の缺點を補はん爲には、國家と尤も親密の關係ある佛教徒は、是非共佛教倫理の基礎の上に立てる普通教育の男女學校を設立せねばならぬとありと思ふ、而して此學校より出づる人物が、他日社會に立ちて倫理上に於て紳士若くは淑女たるの体面を汚さず、品性頗る高潔にして、而もその信念の發動によりて或は國家及社會の爲に大事業を爲し、或は一家に在りては賢夫良妻たるべきに至らば、此學校の目的を達したるものとせねばならぬ、此學校の目的は、僧侶を作らんとせざるに非ず、僧尼を作らんとするに非らず、信念を備へたる社會を形成すべき基礎とならんとするのである、若し信念ある社會の大人物が出来たらば即ち佛門の大人物が出来たのである、小生は佛門に人物の少ないのを歎けども、世間で往々佛門に人物が少ないのを歎く

のと、歎き方が少し違つて居る、世間で歎くのは只宗教家に人物がないのを歎くのである、小生が歎くのは社會に信念ある人物が拂底してゐるのを歎くのである、世間で佛教振興とか佛教改良とかいつてゐるのは、只僧侶社會の勢力を張らせて僧侶が威張ることが出来る様になるのを目的としてゐる様に思はれる、小生が佛教の振張を望むのは、社會が眞に佛教倫理の德澤に化せられて、之を敏ふる僧侶が社會より尊敬せらるゝ様になるのを望むのである、仍て小生は今日の宗教家が、先づ通俗の普通教育學校を設立して、他日諸般の社會に進むべき青年を養育せ、教授の餘暇に於て大に學生の信念を發揚せしむべき學校を作るは目下の急務であらう

次に宗教學校に付ても、小生は全く現今各宗が採用する所の教育制度と意見を異にするものである、固より各宗の制度は皆多少の差異あるが故に、其尤も發達したりといはるゝ、東西兩本願寺の教育制度に付て批評すれば第一の缺點は學生が果して宗教家たるに適するや、將た適せざるやを考へざるこゝである兩本願寺の學制は全く末寺の子弟を養成するにありて、その子弟が僧侶たるに適するや否とを問はず、必ず之を僧侶に爲さんとする、故にその學生にして甚だ僧侶たることを嫌ふものもあるも強て之を僧侶たらしめんとし、又其父兄も強て之を僧侶たらしめんとす、若し此學生をして其欲する所の業に従はしめば社會に立ちて必ず一分の天職を盡し得べき人物なるに、強て之を僧職に従はしむる結果として、遂に不平の間に人となり、其説教は虚妄となり、偽善となり、自己

の信念は却て之が爲に確立するの時なきが故に、僧侶たるの職分を全うすること能はざるは當然のことである、抑も僧侶の職分の尊ぶべきことは今更申すまでもないことであるが、僧侶の價値が今日の如く下落したるは、全く不適任なる僧侶が増加したからである、然らば此不適任なる僧侶を除くには僧侶を嫌ふ青年學徒をして、強て僧侶たらしむるの弊風を打破し、只その信念のみを堅めしめて、本人の望に従つて、各適當なる業務に従はしむるの必要である、かくいへば世人は忽ち不肖の論を以て無謀の言となし、有爲の人材は皆宗教家を去りて佛教は忽ち破滅せんといふものあるべけれど、是は實に姑息の論である、意向なきものを僧侶として置くことも佛教に取りては何の効もなきことである、僧侶の職位は決して輕々しく充たすべきものではない、實に確乎たる信念ありて而も大に之を布教せんとする熱心あるものでなくてはならぬ然るに今日兩本願寺の學制は、信不信を問はず、適不適を論せず、只學事を標準として學校を卒へしめ、直ちに之を住職となし又説教者となすが故に、世俗的小才子が妄りに法義を喃々して人を教ふるの高壇に上り、學び得たる處の諸宗の教相を並べ立て、暗記し得たる西洋哲學の一斑を再説し、愚民はその解し難きに一驚を喫し、智者はその生意氣なるを惡み一座の法筵は却て排佛の因縁となること尠ならず、是れ實に不適任者を許して僧侶となし、末寺の子弟のみを以て僧侶となすからである、

小生の卑見を開陳すれば、初等教育は逆も佛教家が自から施すの力に乏しきが故に、之を世俗の教育に一任し、中等教育は、小生が前段に於て述べたる通俗の普通學校内に於て、他日宗教家とて起たんとする希望あるものを、僧侶の差別なく選抜して、別科を設け、之に其宗派の教義一班と其宗派の教理史及教會史の概略を授け、他宗他派の教乘を教へず専ら信念を堅固ならしめて、僧侶たるべきものが世に處して立つべき職分を覺悟せしめ、卒業の上は或は直ちに僧侶となり或は進んで高等の學校に入ることを許し、高等教育に於ては専ら其宗學の奥旨を探り、兼て通佛教の教義及び西洋哲學の一斑を窺はしめ、學者を作るを以て學校の目的とあさず、大宗教家たるの品性を以て其目的と爲すが如くせんことを望むのである、今日眞宗の大學寮組織は、學者とてても充分ならず、宗教家として充分ならざる人物を作り出すが故に、結局宗教といへる方面より考ふるべきは、甚だ意味なきことに非ずや、小生は大學寮を卒業したる學生の腦中には、我れは宗教家なり、社會人類中尤も高潔なる任務を有するものなり我れは社會に冷遇せられて而も社會の爲に尤も大なる業務を盡すべきものなりとの感念のみ深ひて、我れは學者なり、智者なりとの感念なからんことを望むものである、衆生濟度は學者に非ずして、宗教家の慈悲心である、かく云へば小生を以て佛教學を撲滅せんとするものなりと爲す人もあらうが、小生は學問と云ては又大にその研究の方法を講せんことを望

ひのである、今の大學寮の組織では佛學も亡びてしまふであらう、之を起すには、大學寮學生中より、殊に學才ありて、終生斯學の爲に盡せんとするもの數名を撰拔し、之を東京に送りて、文科大學印度哲學講師の監督を依頼し、大學の諸大家に出入し得るの道を開き、西洋學理の進歩に注目して常に相後れざらしめんことを勉めしめば、或は人數少なしと雖も又我學界の爲に大に貢献することが出来るであらう

盍んぞ宗教政策を確立せざる

南 淨 智 成

我國鎖港主義を排棄して開港主義を取りし以來、未だ久しからずと雖も、歐米の文明は蕩々として輸入せられ、三十年の長日を以て歐米に發達せし文明も、僅かに三十年を以て摸倣するに至る、其進歩の速なる實に驚かざるを得ず、我國民は誰か之れを以て欣悦せざるものあらんや、然れども識者は之れを喜ぶと共に大に憂ふるものあり、何すれど然るや、曰く開港以來政治軍事經濟交通等發達進歩の趨勢は駟馬に鞭つが如きと雖も、是れ實に物質的のみ形式的のみ、精神的文明に至りては物質的文明に伴はざるとなきか、否伴はざるのみならず、日に月に退歩するを見るのみ、士氣振はず、徳義行はれず、社會百般の事皆内容的腐敗を含まざるものなし、是れ識者の憂へらんと欲すれども止む能はざる所以なり、是れ翻て維新以前の我國の状態を観るに、諸侯は該地に割據して其領内に專制政治を施し、其資産に應じて軍隊を組織せ、生

殺與奪は唯其欲する所なりき、隨つて參政權は一部の種族に屬し、多數の人民は唯服従の義務ありて一の自由も一の權利をも有することなし、又諸侯は各幣制を制定し、他領との交通を禁止せしもの多ければ、文明の傳播することあるなく、又交通機關の建設せられざるがために、競争の念を促すべきものなし、故に其物質的文明は停滞して一の進歩發達を見るとなし、更に眼を精神的方面に轉せんか、自利他々兩主義の優劣を論せしものなり、又善惡の標準を争ひしを見ずと雖も、忠を以て緯とし孝を以て經とし、五倫五常の大道は世人の胸裡を離るることなし、又正信迷信の區別を論ずるものなく、地獄極樂の實否を究めしを聞かずと雖も、世人は善因善果惡因惡果を信じて廢惡修善を希はざるものなし、假令之れを希はざるものあるも、世人の制裁は嚴正にして一度之れに戻らんか遂に世外に放逐せらるゝあるを見る、實に倫理學説は行はるることなく、宗教哲學の發達を見ずと雖も、人倫の大道に實行せられて世人を感化し、宗教の本義は實現して人心を誘導するあるを見る、然るに今や物質的文明は能く歐米に摸倣し舊態を一變せしと雖も、精神的文明に至りては歐米より輸入せらるゝことなきのみならず、封建時代の道德宗教は日に頽廢し唯山村僻地に其形跡を止むるのみ、上流社會は不道德を以て觀とし恥ぢず、無宗教を以て自ら任ず、故に榮華を以て理想とし奢侈を以て目的とし、黄金のためには如何あることをも吝すを憚らざるに至る、上流社會にして美風良俗行れんか、

下流社會の腐敗は憂ふるに足らずと雖も、今や上流社會は腐敗墮落を以て下流を感化すること頻なり、浩嘆せざらんと欲すと雖も豈得べけんや、今にして矯正することなからんか我國民は眞理想なく、眞目的なく、現在の爲めに未來の觀念を失ひ、賣國も利慾のためには憚らざるに至り、遂に國家の滅亡を招くに至らん、國家にして滅亡せんか、日本は地理上の名稱と雖も日本國民は黄色人種の一族たるに過ぎざるべし然れば自由もなく、權利もなく、遂に賣國を賭して得んと欲したる利慾も亦失ふに至らん、

今や此不吉なる文字を終らんがため、不吉の文字の實現せざるを計らざるべからず、是れを計るは社會萬人の忽にすべからざるものありと雖も、下流は上流を以て感化すべく、且つ上流にあらざれば之れを計るの智識なく經驗なく且つ間暇を有せざれば、之れを計るは上流に頼らざるべからず、殊に國家の方針を定め國家を統治する立法家行政家、及び國民の蒙昧を開き國民の感化を以て其任とする教育家宗教家の反省を乞はざるべからず、立法家行政家が道德を以て迂遠とし、宗教を以て妄説とするにあらんか、教育家宗教家が如何に盡瘁するも、全國民をして統一的思想を懐かしむるを得ず、又立法家行政家が如何に道德宗教を重するあるも、教育家宗教家に於て熱涙なく唯形式的に其職務に従事するあらんか、亦國民の精神的活動を見ることを得ざるべし、今や立法家行政家は道德を以て迂遠とし、無宗教を以て自ら任し、教育家宗教家は熱血の湧くあるなく、徒に口を糊するの計をな

す、日本社會の日に墮落を極むる宜ある哉、然れども今や教育は稍當局者の注意を惹起する所となり、未だ來光明の閃光を認むるを得るも、宗教に至りては、宗教家の適才を得ざるのみならず、立法家行政家何れも宗教の勢力を認むるなく、之れを順用せんか國家の基礎を固め、之れを逆用せんか國家の滅亡を招くをも知らずして、宗教を度外視するに至る、思はざるの甚しきものと謂つべし、教育宗教何れも精神的勢力の一大原因なりと云へども、宗教の人をして狂奔せしむるは教育の敢て及ぶ所にあらんか「カール」の宗教説は能く佛國の革命を惹起し、近世的文明を喚起したるが如し、然るに當局者は此宗教を度外視して敢て省みざるが如き、其根本的任務を忘却したるものと云ふべきなり、人或は謂ふ、宗教家にして熱情溢るゝもの出でんか、當局者は之れを度外視するも能く國民を薰陶するを得ん、豈俗輩の關する所ならんやと、實に然り、然りと雖もかゝる宗教者の未だ現はれざるに、國家の基礎は日に危殆に赴くを奈せん、而してかゝる宗教家の出づるあらんも、當局者の之れを度外視するときは其成效を見ること難し、彼「ルーテル」の成效せしは「サクソン」侯「フレデリック」の保護による所多く、傳教が桓武帝の皈依を得て、容易に成功なせしを見れば思半に過ぎん、余は論者と共に多情多涙の眞宗教家の輩出を希ふと共に當局者の宗教政策を確立せんことを希冀すること頻なり、

を澄すの間に發會の趣旨は始まれり、次て會員の演説ありて、一同跪て佛尊を禮拜せ、此時奏樂再び起り、「法の深山」なる佛教唱歌あり、次に祝辭、答辭ありて後演説に入り山岸普該(吾人と佛教との關係)、鈴木峯映(不消雪)、藤井界雄(春眠を食る勿れ)、鈴木鳳麟(佛教活用策)、竹内樸郷(佛教徒の責任)の諸氏順次出演各快辨を振て無盡に論じ縦横に説く、終て陛下の万歳を三唱し、國家の安寧と同會の長久を一唱せ、音樂三たび吹奏せられ、雅亮の音聲堂内に充つるの間に散會す、復懇親會を開き、會するもの二百余名、席上數番の演説あり各胸襟を開て十分の歡を盡して散會せりと、時宛かも本部は全國大會の準備に忙しく爲めに祝電を發するを忘れたり、深く同支部に對して遺漏の罪を謝す、

◎同支部の形況 同支部は事務所を三島郡本與板村大字岩方願念寺内に設け、會員は目下二百五十名にして幹事は辨護士山岸普該、縣會議員渡邊保三郎、郡會議員前田善四郎、村長山浦大次郎、並に縣下の豪農山縣三郎次の諸氏なりと、その規則大要左の如し

- 佛教徒國民同盟會北越支部規則
- 第一條 當支部は佛教徒國民同盟會章程により設立し凡て本部の監督を受けるものとす
 - 第二條 當支部を佛教徒國民同盟會北越支部と稱す
 - 第三條 當支部は當分の内三島郡本與板村願念寺内に置く
 - 第四條 當支部に限り左の會員を募り本會に關する機微機軸を有せしめず
 - 一、客員 學徳名望位置衆に超り又たは當支部に功勞あるものを推して優待す

たるが爲氣欲頓に昂り、去月十六日上田町順淨寺に於て町内の信徒僧侶集會して團體組織に取りかゝりたりといふ

◎佛教徒細呂木村同盟會の發會式 同地久米嚴淨氏は過般來非常に運動の結果佛教徒細呂木村同盟會を組織し、去る七日同村大字指中區見神八良右衛門氏宅に於て發會式を舉行したり同日は南條博士の同地方巡錫を幸として招聘し博士は懇篤なる一席の演説を爲したり、その他數席の演説々教ありて午後五時散會せりと同日は殊の外の聽衆にて同地方近來稀れなる盛會なりしと、同會の規約左の如し

- 第一條 本會は佛教徒細呂木村同盟會と稱す
- 第二條 本會は男女老少を問はず細呂木村に住居する佛教各宗信徒及通佛敎的道德の感化を受けたる者を以て組織す
- 第三條 本會の目的は佛教本來の面目を發揮し其感化に依りて佛敎徒の一致力を鞏固にし漸く富國の術を講して國家の獨立と社會の文明に資せんことをにあり
- 第四條 本會の目的を達せんが爲め着手すべき事業の方針を定むること左の如し
 - 一 愛國護法の精神より大日本佛教青年會及大日本佛教徒國民同盟會と氣脈を通し内外一致の運動をなす事
 - 二 各宗僧侶を獎勵し其學徳を修めしめ又其品位を高めしめ又從來の惡弊を改善する事
 - 三 殖産興業の道を講ずる事
 - 四 社會問題を研究し社會的慈善的事業を興す事
 - 五 佛教の繁榮を妨げんことを不正の行爲あるを見認むることは官民の別なく自衛上飽まで之を排斥する事
- 第五條 本會は佛教各宗の合同は勿論宗義上宗制上我國体と衝突せざる限りは何人も難相提携して社會改善を謀る事
- 第六條 本會會員たる者は國憲國法を遵守するは勿論常に德義を實踐すべし
- 第十六條 本會は會員の親交を温めんが爲め毎年春秋二回總會を開く事
- 第十七條 本會は毎年敬回學識徳望の師を聘し演説並法話會を開く事

二、助員 本會の主義を奉し一時金五十錢以上又は毎年拾錢以上を寄附するものとす

第五條 投票公撰を以て所屬會員中より左の役員を置き任期を一ヶ年とし再撰を妨げず

一、幹事(無定員)常に當支部を代表し本會規定の幹事大會に列するの資格を有す

二、司計(二名)當支部の出納を司る

三、會計審査員(二名)當支部の會計を審査し決算報告に連署す

四、商議員(十名以上)會員の多寡に應じ各地に一名以上を置き重要なる會務を議せしめ兼て會金の徵集を委任す

五、理事(四名)商議員の投票によりて撰定し當支部一切の事務を處理せしむ

第六條 毎年三回以上公開演説及び茶話會を開き其他本會より指定せる各般の事業を實踐す

但し本條の實施に關する細則は商議員會の決議に一任す

第七條 當支部に屬する會員は國會議會郡會の議員并に公共の利害に關する名譽職には異教徒を舉げざることを(下略)

◎米北に於ける政教問題の趨勢 日を追ふて氣焔を高め賛衆土屋法潤氏歸國次第三條町に於て米北の大會を開き一層の聲を盛にせんとの計畫ある由

◎米北第四組の運動 米北大谷派寺院第四組は米北中最も氣焔の熾なる所なるが、去月七日より十二日迄井上圓成氏を聘して、吉井村受徳寺、井ノ岡村願淨寺、伊毛村願隆寺、の三所に於て演説會を開きしに至る處盛會にして大字毎に政教義會と稱する團體を起し、大に政教問題の輿論を高めたり

◎長岡町の運動 同町は去る二月廿一日より廿四日迄長岡町安養寺に於て、井上圓成氏時事問題につきて演説をなし

第十八條 毎年秋季總會に於て會計の報告をなす事

第十九條 本會は節儉義僕及實業に熱心なる者を賞する事

第二十條 本會會員にして不時の災難に罹りたるものには充分の義捐をなす事但し會員死亡者の爲には毎年秋季總會同會員會同の節一席の法會を營む事

和 泉

◎和泉佛教會 和泉に於ては今迄有志者團結の聲を聞かざりしが、時勢の推移は人を驅りて元氣ある活動を爲さしむ

去る一月十六日同地の寺院集合することあるを機として同盟會組織の談は起り、種々協議の末遂に戸次公鎮氏を幹事に苑樹寛氏を副幹事に撰みて諸般の事を依囑したり、夫れよりト半了啓、戸次公鎮、加藤堯壽、大野順道、苑樹寛の諸氏は遊説員として、北は堺市より南は樽井地方にまで奔走し、二月十七日岸和田町圓成寺に於て諸宗有志者の協議會を開き互に盡力すべきことを誓ひ、去月十日更に集會して會則を編成し

去月廿六日圓成寺に於て發會式を挙げたり、折悪しくも同日は朝來天候悪しく、加之午後に至りては風雨劇しかりし爲僧俗の來會者多からざりしと雖、熱誠なる有志者は風雨を侵して集り會し、爾後罷勉努力して同會の發達を計ることを約したりと、而して幹事はト半了啓、戸次公鎮、桑田貫道、大洞石雲の四氏を、會計には松山秀英、加藤堯壽の兩氏を撰びたりと、會則左の如し

- 第一條 名稱 本會は和泉佛教會と稱す
- 第二條 位置 本會の本部を岸和田町圓成寺に置く
- 第三條 目的 佛教の感化を以て社會の道義を振興するに在り
- 第四條 會員 各宗僧侶を正會員とし信徒を贊助會員とす
- 第五條 事業 本會は第三條の目的を達せん爲に左の事業を爲す

第一項 毎月一回開會して會員互に策勵して智徳を修め通佛教に基きて演説を爲す

第二項 本會は教界に於る時事問題を討議し必要を認むる時は各地方同主義國隊を氣脈を通し一致運動を爲す事あるべし

第三項 幹事に於て會議を要するに認むる時は臨時に會議を開く

第六條 役員 各宗毎に幹事二名を撰擧す會計主任は正會員一名賛助會員一名とす但し任期は滿一ヶ年 (下略)

羽後

◎羽後大曲町の有志 全地の板先教瑞民主として同盟會組織の事に付目下盡力中にして既に入會を申込みしもの六十餘名なりといふ、同地は佛敎の盛なる地なるを以て前途頗る多望なりといふべし

此外各地よりの通信ありと雖紙面に限りあるを以て次號に廻したり

寄附金

- 福岡縣企救郡東紫村 米田榮太郎殿外八十名餘 一金八圓七拾錢
 - 横濱太子教會長 渥美愛三殿 一金壹圓
 - 越後魚沼郡赤崎村眞宗高派 柳澤開宗殿 一金八圓三十三錢
 - 佐賀縣杵島郡中通村 信徒 全 一金壹圓七十錢
 - 全 婦女妙好社 全 一金五十錢
- 右茲ニ謹て厚情を謝し奉候也

社 會

◎大日本佛敎青年會春期大會 去月二十九日午後一時より上野三宜亭に於て開會せり、會する者八十人、席定ま

るや幹事近角常觀氏は開會の辭を述べ、且つ今回越後新發田尋常中學校長として赴任せらるゝ文學士廣田一乘氏、同校教頭として赴任せらるゝ文學士水月哲英氏、並に教育事業の爲めに渡臺せらるゝ前岩手縣尋常中學校教諭武宮環氏の送別の辭を述べ、三氏交るゝ答辭を述べ、次て議事に移る、第一第八回釋尊降誕會の準備は主任哲學館委員井口泰温氏より、第二第八回夏季講習會につきて敦賀有志者よりの報告を同國出身の委員有馬祐政氏より、第三會堂建築の件につき同委員秦敏之柏原文太郎兩氏より、第四監獄問題運動の經過を幹事より、第五政教問題につきて研究會に於ける進行を同委員の一人より、第六會計結算を幹事より、何れも報告し、幹事は青年會の事務擴張したれば評議員を設くるの必要あることを陳し、滿場之を容れ、撰擧の結果、柏原文太郎、秦敏之、眞岡海海、杉村廣太郎、櫻井義隆の五氏當選せられたり、乃ち其に晚餐を喫し、釋尊降誕の聖日に於て相會せんことを期し、談笑歡晤、和氣霽々の間に散會を告げたり、時に午後六時

◎釋尊降誕會 年を遂て盛大なるものは、大日本佛敎青年會が催す所の釋尊降誕會あり、去る八日には東西兩京を始め諸所に降誕の祝會を催されしと聞く、何れも盛大ありしとは、諸新聞の報道する所なり、偉なる哉釋迦文佛の徳、大日本佛敎青年會の降誕會は、例年の如く、錦町錦舞館に於て開かれ、當日の講演者は、三浦梧樓子、奥田貫昭師及井上村上兩博士なりき、而して星月夜を題する八十餘頁の美麗なる冊子を施せり、同書は常盤文學士等の筆に成れる、法然、

道元、親鸞、日蓮四大徳の事蹟を、優美に歌へる新体詩なり

なほ左の諸氏より祝電を寄せられたれば謹て其厚意を謝す。

備後有志者、佐渡尋常中學校長 八田三喜君
 在金澤 南條文雄師、越后高田師範學校教頭太田秀穂君
 在九州島地獸雷師越後新發田尋常中學校長 廣田一乘君、
 同教頭水月哲英君 (此外混雜の爲め洩れたるやも期しかたし請ふゆるしてよ)

又愛知醫學校にても同日講堂に於て、嚴に降誕會を舉行し、長谷川、岡田、早川其他來賓等の演說祝辭等あり終りて、茶話會を開き和氣洋々の裡に散會し、來會者は三十餘頗る盛會なりしと、來賓には同校の教授諸氏并に同地の有志者にして當日は本派の寄附にかゝる音楽、大派よりの釋尊一代記を來會者に分與したりとぞむ。

◎佛敎外護の責任 これ釋尊降誕會に於て、三浦將軍の演説せられたる所なり、其大意は今日佛敎の振はざるは、僧侶の罪にもあるべけれど俗奉佛者たる所の居士などは、外護の責任を盡さず、徒らに僧侶の爲すべき事を爲して、却りて僧侶の邪魔をするは遺憾なり、在俗者は在俗者らしく、僧侶を助け僧侶を敬すべし、又今日は萬事運動の世の中なり、運動の勢力さへ強くば、事は成就すべし、故に佛敎家は誰に遠慮もいらす謙遜するにも及ばざれば、進んでドシ〜運動すべしとの意なりし、これ我輩の心を得たるもの

◎教會堂建設 大日本佛敎青年會が會堂建設を望むや久し、而も之に着手するの勇氣無かりしが、將た時期至らざり

しか、容易に其發表を見ざりしが、去る八日釋尊降誕會の席上に於て、幹事近角常觀氏は、會堂建設の旨を發表せり、吾人は之を喜ぶ、既に發表す宜しく同會員は此業に勇猛精進して、速に成就せん事に努むべし、又世の奉佛諸氏も必ずや、立て此舉を贊助せらるべきあり

◎慈善事業 大日本佛敎青年會は、又今後慈善事業に力を盡すべしと、是余輩と志望を一にするもの、余輩は同會と相提携して、是等の業に従はん事と希ふ、昨年巢鴨監獄事件以來、青年會諸氏が俄に目の覺めたる如くに、從來默考主義に代ふるに、活動を以てするに至れるは、大に余輩の賛する所

◎婦人論 近來目切盛になれるは婦人論なり、家庭改良といひ、女子教育と言ひ、女權擴張と叫ぶ聲は、殆ど何れの新聞雜誌等にも見ざるなし、我等が餘程最負目に視ても、美ならざる家庭、不自然極る男女の關係を、習慣風俗を異にせる外國人等の目より見れば、嗚呼訝に堪へぬ事あるへし、内地雜居も眼前に迫れる今日に在りて、男子の專横を戒め、腐膈男子の心膽を寒からしむるは、最必要の事なり、さりながら一方より見れば、是等男子の罪惡は幾分か女子の自ら招ける所なり、今日我國の女子の價値を仔細に點檢せよ、其嗜好は甚だ卑野にして、愚にも付かぬ鈍帳芝居を見るを無上の樂とし、少しく高尚なる快樂は窮屈として懶がり、晴の場などへ出る事は、兎角に尻込し、同じ書物を讀むにも、草冊子や講談集などを喜び、爲になるものを見るを好まず、斯る有様にては女子は男子の玩弄物にせらるゝも、一分は致方なき次

第なれば、是より女子も自ら其位置を進ん事に熱心して、男子の玩弄物たるべからず、好伴侶なりといふ見識と實行を示さざるべからず、夫には第一着に其嗜好を高尚にせし、男子も亦玩弄物に連れ添ふなど、は氣の利かぬ話にして又心細き次第あれば、注意して婦人の位置を進むる途を開くべし、要するに教育なき時は嗜好も自ら野卑に流れ、位置も下落するは自然の趨勢なれば、今日の急務は専ら女子教育を盛にするより外無かるべし、政府も人民も此點には、最多く心を用力を盡されん事を希む

◎教育基金の用途 文部省は五十萬圓といふ金を貰ひ込んで目下其使用法に當惑して、近々高等教育會議に諮詢する由なり、今此用途に對する意見といふを聞くに、第一教員中の功勞ある者に奨勵金を與ふとの説、第二現今の小學校は甚だ不完全のもの多ければ、之を補助して學校の設備を十分ならしむべしとの説、第三は此金を以て全國尋常小學の授業料を全廢すべしとの説、第四之れを以て體育を盛ならしむべしとの説、第五各地に普通教育に關する圖書館を設置すべしと、其外種々なる意見續々湧出する趣なり、之を娘壹人に培八人と言はんか、斯る問題は蠻勇のみにては決せられぬものにや第二説の如きは頗る取扱方困難なるべく、第四説の如きは固より辭說なるべく、第三説の如きは、可は可なれども私立學校の處置を先づ初に付け遣らざるべからざる困難あり要は第一説第五説を並用する位が落なるべきか

◎基督教學校 基督教各派にては、來る七月以後内地雜

居に於るを機として、教會に屬する小學校を設立して、布教の傍貧民教育を盛にせんと、目下類に計畫を廻し居る者多しと、借問す、佛敎家は之に對して如何なる準備かある、うは扱措き、多數の基督教學校に用ふる所の倫理教科書は如何にすべきかは、一大問題なれば、明後十七日より開かるべき高等教育會議に諮問し、私立學業に準じて處分すべきも、文部現當局者は、嘗て下賜せられたる勅語の方針に基き、大に精神的教育を發揚せんと決心なれば、是等教科書も斷然普通學校の教科書と同様のものを撰すべき意見なりとす、面白し其決心ならば、シツカリ臍を固めてやるべし

◎埼玉慈善會 世の論者は、動もすれば基督敎者が社會的慈善事業に盡すを稱揚し、佛敎徒が是等の事業に冷淡なるを議するも、之れ實情を知らざるの論なり、千有餘年前より業已に慈善事業に眼を注ぎし佛敎者にして、安んず是等の事業を全く顧慮せざる事あらん、唯々武家時代數百年間は、殆ど民間に於て斯る事業を爲すを要せざりしを以て、自然に是等好事業は退縮して、今日割合に發達し居らざるは慨しき次第なり、中に就て、愛知育兒院の如き、埼玉慈善會の如きは、早く此好事業に着目して、今日多少の成績を擧げたるものなり、愛知育兒院の事は前に已に言ひつ、埼玉慈善會は、其起原明治二十二年に在り、當時同縣の有志僧侶諸氏相計りて、此業を起せり、其事業は、貧民子弟の教育、感化、免囚保護、監獄敎誨等を爲そに在り、今日殊に成績の良好あるは貧民教育と免囚保護となり、當時は縣會議長之れが會長とな

り、頗る盛大なり

◎西藏探求 西藏は最も探求すべき價値ある國なり、其地理、政體、教法等一として探求に價せざる者はなし、歐洲人と雖も猶詳なる探究を遂げたる者なし、近來東本願寺派の能海寬寺本婉雅兩師相繼で、西藏に入る、壯なりと謂ふべし、吾人は切に兩師が健康にして、素志を遂げて歸朝せられん日を俟つ、其世界の智識に、又國家に、宗教に貢獻する所頗る多大あらむ

◎支那布敎の模様 東本願寺より派遣せられて、清國南京に留錫せる藤分見慶氏よりの來信を見るに、蘇州にては、清國官人と我領事等と、終始折合悪しく、軋轢常に絶ゆる有様なれば、隨て布敎も困難にして開敎の見込薄しと、之に反して、南京の方は平穩無事にして布敎に都合善く、開敎の望十分なりと、元來教法家の他邦に布敎するは、十方衆生一視同仁にて佛陀の德音を直ちに傳ふるに在り、故に軋轢せる間も教法家を俟て始めて開利するを得べき道理なり、されば蘇州の如き地方こそ、俗吏輩が蝸牛角上の小争を爲す間に立て眞正宗敎家が佛陀微妙の德音と靈光とを顯すべきなれば、俗吏の軋轢、爲に絶望する如きは或は僧侶の常習なる卑屈根性にて、彼輩の鼻息を伺ふに起因せずや、然れども局外者にして實地を知らざる余輩の批評は全く事實に反するやも知るべからず、然らば幸なり、若し余輩の杞憂するが如き事あらば、大なる誤なり、早く官を捨て彼住民の友となれ、余輩は此概文に向て、大に同情を表するものなり、小本山か

僅かの資金を以て、申譯的、裝飾的に設けたる學校は到底不完全を免れざるなり、斯る見込のなき名聞的の事業を爲さんより、寧ろ斷然名を捨て、實を取るの方針に出で、世間の完全せる中學に向て、教育を托するの勝れるに如かざるなり

録

予力誕生佛

左の一篇は目下伊豆賀茂郡田子村に巡錫中なる釋宗演師が去る八日佛敎青年會の釋尊降誕會に送り越されたるものにして當日會員の代讀したるものなり
今本欄に取めて讀者の一覽に供す

佛陀とは眞の極あり善の極なり美の極なり眞の極之を法身佛と云ひ善の極之を報身佛と云ひ美の極之を應化身佛と云ふ此三身の取も直すは汝が一念心上孤明歷々底是なり又此理の天眞佛と名く人若し明窓の下淨身の問一炷の香を點して端坐瞑想一番して觀る箇の屋裡の天眞佛は天上天下唯我獨尊の叫びを以て降誕し來らんなり其狀恰も月の雲を離るが如く花の風に綻ぶか如く蚕の繭を吐くか如く蜘蛛の網を掛けたるか如く法爾自然無功の功無作の作其天眞爛熳々雍々たること亦他に比較すべからざるなり

大華嚴經に曰く菩薩兜率陀天より神を降して下る時此林中十種の瑞相あり一は忽然として廣博なり二は土石變して金剛と爲る三は寶樹行列す四は沈水抹香種種莊嚴す五は華鬘充滿す六は諸寶流出す七は池に芙蓉を出す八は天意夜叉合掌して住す九は天女あり合掌恭敬す十は十方諸佛齋中より光明を放て普く林中を照して佛の受生を現す(以上)抑も此十種の瑞相ありものは何等の現象なるか神話か奇蹟か將た夢中の幻影か否なり

今夫れ所謂純眞の極則より之を謂ふときは佛陀の法身は量太虚を包み蕩々として十方に遍く恢々として三際に亘り巧玄極に臻り理化元を絶す是故に釋迦老子曾て兜率を離れず曾て王宮に降らす曾て母胎を出てす曾て雪山に入らば曾て道樹に詣らず曾て魔軍を降す曾て淫漿に入らず曾て舍利を收めず亦曾て塔て法眼を付せず曾て涅槃に入らず曾て舍利を收めず亦曾て塔

廟を起さず亦曾て法蔵の結集すへきなく一道清淨平等不動な
 らし如何今日四月八日所謂善美の當体より之を觀するに
 降誕の最大吉祥なり花の上野霞の墨現は直に是れ幾處の藍
 毗尼園なり咲きも揃はす散りもせぬ雪雲の櫻林は直に是
 れ百千の無憂樹を以て莊嚴し流泉浴池花木芳華翠翳鸞鳳等
 楯階陸鳥其中に集り鳴く懸繪幡蓋散華香象ふし先きの華
 帝釋の歡喜園の如く是れ眞景見るの善美の顯象にして其愉絶
 嚴に説く瑞相と併せ是れ皆心的功利に汲々たる輩の夢にた
 絶の境界は到底世の物質に拘々し功利に汲々たる輩の夢にた
 も想見し能はざる所あり
 又傳に曰く四月八日初出の時夫人園中を見るに一大樹あ
 り名けて無憂と曰ふ華色鮮明葉分佈して極めて茂盛とす即
 ち右手を擧げて之を牽き摘んで欲する菩薩漸々右脇より出
 鳴呼佛を擧げて之を牽き摘んで欲する菩薩漸々右脇より出
 せしめんとす怪むこと休めよ右脇降誕の事夫れ留王は股よ
 り生す而して予か所謂誕生佛は即今汝が清淨の一念心上より
 生ずる已に錫鬘豆各地を巡化し南船北馬席一處に温るるに
 暇あらず時佛降誕の聖日然れども巡教豫定あり求に
 予か出家を促すこと能はざる乃ち之れを述し其責を塞く
 四月五日 南豆田子の正法院客窓にて 釋宗演

信 界

靜觀錄 (二)佛の人格 近角常觀

佛は慈悲の塊である、佛は智慧の塊である、私は常に考へて
 居るに、佛は慈悲ある人、智慧ある人と云ふよりも、寧ろ慈
 悲か凝り塊まりて人とあり、智慧か凝り塊まりて人となりた
 るが、即ち佛であると考へている、吾々は随分罪惡の深きも

のである、されど情ある人の心は自から私の心に映りてくる
 吾々は随分不明のものである、されど智慧ある人の啓發を蒙
 れば、智慧の範圍が一步づ、廣くなる、吾々は自己を顧みれ
 は、甚しき冷酷なものである、甚しき暗黒なるものである
 云ふことは、十分自覺して居るが、世には其中に暖かさ情な
 るものがある、又智慧の光がある、云ふことは、經驗上確
 である、考へて居る、果して情なるもの、智慧なるものか
 りとせば、世には無限の情なるもの、廣大の智慧なるものも
 あると考へる、此無限の情が塊まりて人ととなり、無限の智
 識が形にあらはれて、吾々に無限の感化を與へらるゝが佛であ
 る、一飯の情も身に感じ、一言の忠告も猶心に徹するものか
 れば、まして、此無限の情、無限の智慧が、いかで吾々を動かさ
 いることのあるべき、いかに冷酷なる胸中とはいへども、自
 づから暖かき春を生しいかに、開眼なる眼中といへども、自
 づから希望の光明が輝きてくる、是が私が經驗の上より來る
 佛である、人格ある佛である、吾々が人である已上は、人格
 ある佛でなければ、私の心に適切でない、確かど佛の手に觸
 れねば安心は出來ぬ、歷々照臨し給ふ佛あればこそ、日夜冥
 見に耻入りて日暮が出來るのである。
 佛は實に絶對の境界である、吾々如き豆の如き眼を以て臆測
 することは出來ぬ、されど眞如とが法性とか云ふときは、漠
 然として、取りつめなきもの、様に考へ、恰も大風に灰を撒
 きたるが如き感を生し、望洋の嘆を發する弊がある、故に此
 絶對中に融合したるときは、吾々の個人性も滅却せられ、恰
 も大海中に溺死するものであると考ふるものがある、これは
 大な誤解である、佛は此の如き血もなき、涙もなき、枯木死



灰の如きものではない、若し佛が如何なるものかを知らむと
 それば、此絶對に融合して、人世上に形をあらはせる佛をみ
 るがよい、即ち歴史上の佛陀をみるがよい、即ち迦耶の釋尊
 は生ける身と肉を具へたる絶對である、釋尊の歴史を緝く
 るときは、如何にも圓滿完全なる佛陀の人格が、吾々の眼中に
 髣髴として現はれてくる、即ち釋尊の歴史を透して、佛陀の
 佛を伺ふがよい、近時歴史的の研究が盛なるより、今迄
 高閣の上に束ねられてあつた佛陀の眞面目が人世上に活動し
 てきた心持がするされど私は根據を歴史上の釋尊のみに置き
 て、信仰を立つることは困難と考へる、つまり、徹頭徹尾釋
 尊を以て一人間と考へて眺める丈では感服が出來ぬ、若しかく
 眺むるときは、唯一の達人である、一個の豪傑である、宗
 教的の信仰は決して英雄崇拜のみでは成立しないと考へる。
 始なく、終りなき、眞如絶對の妙境界は、如何にも廣大にし
 て、鑽仰に堪へない、されどあまり遠くして吾々の手が届か
 ぬ心地がする、又始あり終ある歴史上の釋尊は、如何にも適
 切にして感激に堪へない、されどあまり近くして永遠安心の
 根據としては猶奥底がある心地する、然るに此二者の間に立
 てる始あり終なき因酬報の佛陀なるものがある、是か即
 ち慈悲の塊である、智慧の塊である、而して正しく佛陀の人
 格は此處にあらはれてくる、吾々の手の觸る、佛である、一
 たび手が觸れた已上は、無量劫を盡し、無邊際を究め、恍惚
 として其胸中に銘融する、のである、實に樂の極點である。
 實地を自狀すれば私は久しき間始ありて終なき佛がある、云
 ふことが合點が行かなんだ、全体理屈でいへば始なければ終
 なく、始あれば終あるが當然である、然るに終なき佛にして

始あると云ふことは、頗る疑を挟むだけども、かへりて
 みれば此始ある點か最も喜ぶべき點である、此始が吾々の安
 心出來る根據である、何んぞなれば佛陀の情は佛陀の始に於
 てあらはれてある、佛陀が吾々を救はむためにあらはれたの
 である、慈悲の塊まりが初めて佛の始が出來上りたのである、
 智慧が塊まりて佛が出來上りたのである、即ち吾々を救ふた
 め自ら人格化したのである、されば人格ある佛なればこそ始
 があるのである、其始ある點か有難い、是あればこそ、歷々
 として身にひきつけられ、油然として感謝の念も起る、つま
 り、最も疑たる點か最も感謝に堪へない點であつた、
 已上は全く自己の信仰の經驗より割り出した佛陀である、後
 から氣がついてみれば、古より唱へて居る、佛陀の三身説と
 何の異なる點もない、彼の三身説なるものは信仰の經驗の結果
 によりて鐵を治ひ上げた教理である、歴史的批評で其價値を
 上下出來るものではない、かく佛陀の人格を眞想すれば直ち
 に其佛陀の居所を求め、又其膝下に行きたいと云ふ念慮は物
 々として頗る切なる想がする、此に於て今迄研究上に於て決
 して通過すべからずと悟覺したる關門は内的經驗によりて容
 易に通過したるのみならず、顧みれば是れ吾々を誘ふために
 久しき已前より先方より開かれたる門戸であつた。打明けて
 云へば他宗の批評をするではないが、私は耶蘇教で始なく終
 なき神が直ちに人格を有せると云ふことは、とても合點が出
 來ぬ、定めて耶蘇教信者を以て自任して居る人でも、随分苦
 心して居る人も多いと想像する、私は寧ろ情と普識が凝りて
 出來た始ある佛陀の人格が嬉し、是が私の信仰の中心である。

西方淨土とか往生淨土とか

廣 告

常盤 大定先生 新作
久保猪之吉先生 合編
服部 躬治先生 合編
横山大親先生 畫

星 月 夜

製本美麗紙質良好
定價七錢郵稅貳錢

本書は有名なる常盤文學士及方今歌學界を震
撼せるいかづち會の錚々たる久保服部の兩君
が滿腔の熱心と十二分の同情とを以て鎌倉時
代の法然道元親鸞日蓮の四大德を歌へる神韻
かり此等四聖の流を汲み德を慕ふ人士及文學
に志す諸君は必ず一本を購讀あれ

東京市本郷區森川町一番地

發 行 所 大日本佛教青年會

佛教徒國民同盟會編纂
耶蘇教非公認論

代價郵稅共金二十錢十部以
上一割引 政教時報購讀者
に限り二割引

佛教徒國民同盟會入會手續

四方同感ノ諸彦は左の書式に従ひ個人若くは連名を以て至急
御申込被成下度候用紙(美濃野十二行、地方部設立の分は地方
部へ一通を止め、本部へ一通御送致被下度候)

入會申込書

佛教徒國民同盟會の趣旨に賛同し加盟仕候也
年 月 日 原籍族籍姓 名印

佛教徒國民同盟會御中

明治三十二年四月十四日印刷
明治三十二年四月十五日發行

(明治三十一年十二月二十六日逓信省認可)

政教時報第七號目次

- 社 說 社會の墮落、宗教勃興の時機、慈善的事業
- 論 說 刻下の最大急務、富源を山に求めよ
- 會 報 各地の運動
- 社 會 奧村葦名の兩師 ● 近衛公爵の雲遊 ● 清韓人子弟の教育 ● 小學校國庫補助案 ● 鳥取縣出獄人保護會 ● 家庭教育 ● 表面と裏面 ● 日本商品の外國に於る有様
- 雜 錄 杭城日文學堂
- 信 界 靜觀錄(四) 我を捨てむと欲すれば捨る能はず
- 今 昔 明治の大悲母瓜生岩子刀自(三)

本 誌 廣 告

- 一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす
- 二、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 三、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 四、本誌定價左の如し

一 部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全 國
金貳錢五厘	金五錢	金參拾錢	金六拾錢	無遞送料

● 廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
- 二、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地佛教徒國民同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷區森川町一番地

發 行 所 佛 教 徒 國 民 同 盟 會 出 版 部

發行兼編輯人 兼名慶一郎
印刷 三島良忠